

19世紀アルザスユダヤ人の同化と初等教育

川崎垂紀子 文学部歴史学科西洋史専攻准教授

[プロジェクト報告]

L'assimilation des Juifs d'Alsace au XIX^e siècle et l'instruction primaire

Akiko KAWASAKI

Maître des conférences, Département de l'histoire occidentale, Faculté des Lettres, l'Université de Tokai

Après que les Juifs en France ont été « émancipés » pendant la Révolution française, il a été question de réaliser leur assimilation au XIX^e siècle. Nous réfléchissons notamment sur les Juifs d'Alsace. La raison est comme ci-dessous ; 1, leur communauté a été la plus traditionnelle et il a été considéré que l'assimilation est tardée. 2, leur influence a été toujours forte même après que la population des Juifs à Paris a augmenté. 3, la région d'Alsace était demandée à assimiler en France depuis longtemps puisque son caractère culturel et social était assez germanique.

Il est évident que le problème de l'instruction primaire est important pour penser à l'assimilation des Juifs d'Alsace. Donc il est nécessaire d'étudier sur les réformes de l'instruction primaire après la Révolution, sur l'idée du consistoire qui a été l'institution d'encourager l'assimilation des Juifs et sur la différence entre l'instruction vis-à-vis les Juifs d'Alsace et ceux d'autre région.

Même si nous ne terminons pas notre étude encore, mais il est possible de retirer quelques points. La première école primaire juive d'Alsace a été installée à Strasbourg en 1820 par le consistoire. Dans cette école l'objet de programme a été pour avancer l'assimilation des Juifs, donc la place de la langue française a été centrale. Il y a eu aussi des cours d'allemand et d'hébreu, mais il a été strictement interdit de parler l'yiddisch alsacien (la langue populaire parmi les Juifs d'Alsace). Mais dans le milieu rural l'instruction primaire n'a pas tellement changé même après la Révolution puisqu'il n'avait pas beaucoup de professeurs compétents et il y avait pas mal de Juifs qui étaient contre le programme « moderne ». Il faudrait analyser encore pour vérifier les réformes lors de la lois Guizot et après cela.

Accepted, Dec. 2, 2013

1. これまでの研究状況

フランス革命とともにフランスのユダヤ人に市民権が与えられ、いわゆるユダヤ人「解放」が実現されたのであるが、その後、いかにユダヤ人をフランス社会へ同化させるか、ということに関しては19世紀フランスにおいて大きな課題であった。ここでいう「同化」とは、宗教に基づいた法規範を持ち自治共同体を構成していたユダヤ人が、自治を放棄してフランス社会に組み入れられることである。そして、ユダヤ教はあくまで宗教としてのみ扱われることが要求される。この同化の問題について、特にアルザス地方のユダヤ人を対象に考察している。アルザスを取り上げる理由は、1. 市民権が付与される前、解放前までフランスにおいてもっともユダヤ人の多い地方であり、もっともユダヤの伝統に忠実な共同体を構成していたこと、2. 市民権付与後パリのユダヤ人人口が増加するが、アルザスから移住した者が多く、フランスの

ユダヤ人社会におけるアルザスユダヤ人の影響力が大きいこと、3. そもそもアルザス地方が神聖ローマ帝国領からフランス領になった地域であり、フランスへの同化が常に問題になっていたこと、である。

この同化の問題を考えるうえで、教育、とりわけ初等教育の重要性は明らかである。それは、フランスへの同化を促進するためにはユダヤ教の伝統的な枠組みにおける教育ではなく、新たにフランス市民にふさわしい教育を施すことが最も有効であると考えられたからである。したがって、この点に基づいて、解放後のアルザスユダヤ人社会における初等教育制度はどのようなものであったかできるだけ実態を明らかにすることで、どのような教育が彼らの同化の実現を可能にするのかと考えられていたかを考察することは重要である。また、同時にフランス全体の初等教育の枠組みの中でどのような位置づけをされていたか、アルザスならではの問題はあったのか、といった点について考察を加えることも必要だと考える。

そもそも、フランス史において国民統合の観点から初等教育の問題は重要視されている。フランス革命後も教育におけ

るカトリックの影響が大きかったなか、とりわけ普仏戦争敗北後の第三共和政期において将来の強いフランス国民を育成するために、初等教育の改革が行われフランスの公教育制度が本格化したのであるが、その改革の中心は宗教教育を排除して世俗的な教育を施すことであった。その意味で、フランス初等教育については、無償・義務化・世俗的教育の三原則を定めたフェリーの政策をはじめとする第三共和政期を対象とする研究が非常に豊富である。しかしながら、それ以前においても様々な形で初等教育の改革が行われていた。王政復古期に本格的に初等教育の改革を実行する政策が講じられており、1816年2月29日の勅令は、「フランス初等教育の憲章」と呼ばれている。ここでは、各市町村（コミューン）に対して児童に教育を施すことが義務づけられた。そして、七月王政期の1833年6月28日法はいわゆるギゾー法と呼ばれており、コミューンに公立初等学校を設置することが義務付けられた。ただし、この時期の第三共和政期との最大の違いは、公教育であっても世俗化は進展しておらず、宗教、すなわちカトリックの影響力が革命前と同様、非常に大きいままだったことである。このことは当然ユダヤ人に対する教育にも影響した。

アルザスユダヤ人の同化について考察するうえで、言語の問題は非常に重要である。彼らはアルザス・イディッシュ語を話していた。アルザスでは、高地ドイツ語方言の一つであるアルザス語が話されており、アルザスがフランス領になったことを契機にこの地方でフランス語化政策が実施されて以降も、住民の大半は普段アルザス語を話していた。そして、アルザスユダヤ人はこのアルザス語の影響を受けたアルザス・イディッシュ語を話していたのである。しかし、解放後この言語は粗野な言語であり、彼らの特殊性を強調するものとされ、シナゴグにおけるアルザス・イディッシュ語での礼拝の禁止など、排除される傾向にあった。この言語的状況が初等教育の場ではどのように反映されたか、という点については確認する必要がある。

このような背景を踏まえ、本テーマを考察するために、以下のような点について研究を進めている。

1) フランス革命以降の初等制度はどのようなものであったかについて改めて整理し、その時々の政治体制の変化が教育改革に与えた影響、教育科目の内容、宗教の影響などについて分析する。そこで、当時はどのような初等教育が求め

られていたのか、その目的と問題点はどのようなものであったかまとめ、ユダヤ人に対する初等教育を考察するための枠組みとして提示する。

2) 解放後のユダヤ人向けの初等教育はどのようなものが理想として考えられていたのであろうか、これを見るために、ナポレオンによる四宗派（カトリック、ルター派、カルヴァン派、ユダヤ教）公認宗教体制の政策によって設置されたユダヤ教徒の国家による監督機関である長老会の見解を中心に分析する。長老会とは、ラビと世俗の有力者からなるユダヤ人自身による機関でもあり、当然ながら、長老会の任務の一つとしてユダヤ人の同化を促進することは重要であった。したがって、長老会の立場を分析することで、どのような初等教育がユダヤ人自身によって望まれていたのか見ることができよう。

3) フランスの初等教育制度の改革が進む中で、ユダヤ人に対する初等教育はどのように関連していたのか、さらに事実上カトリック勢力が教育の場でも強固なままであったなか、新しい教育立法が制定されるごとにそれらがユダヤ人社会にとってどのような意味を持ったのか明らかにしていく。

4) 同化が遅れているとされたアルザスのユダヤ人初等教育は他地方と違った独自の教育プログラムがあったのであろうか、また、あったとすればそれは同化を促進するためのものであったのであろうか。実際に設立されたユダヤ初等学校における教育内容、施設や規模、生徒や教員の状況など、その実態を見ることでこの答えを引き出していく。

2. 研究成果

現時点までの研究成果の一部として、10月に開催された日本ユダヤ学会において「19世紀前半のアルザスユダヤ人における初等教育」という題目で報告を行った。その報告では、時期をギゾー法公布までに限定して、19世紀前半のフランス初等公教育の歴史についてまとめたうえで、アルザスユダヤ人に対する初等教育はどのようなものであったかを説明し、その意義について考察した。

この報告の中で明らかにした点は以下の通りである。

王政復古期以降、児童に教育を施すことが義務付けられたが、実際に初等学校の設置はなかなか進展しなかった。その状況はギゾー法によって各コミューンに初等学校の設置が義務付けられたことが制定されても、劇的に変化することは

なかった。ただし、教育行政機関が整備され、教員養成、教員資格の規定なども決定されるなど、教育改革自体は続けられた。それでも、司祭が教育行政機関の一員になったり、教員人事に介入したりできるなど、王政復古体制であったことも反映して、依然としてカトリックの影響力は大きいままであった。それから、教育方法については、年長の優秀な生徒に教員の助手役を務めさせ、年少の生徒を教えるというイギリスから伝えられた相互教授法が1820年代から1830年代にかけて大流行した。これがもてはやされた理由の一つは教員不足を解消する方法であったためであるが、プロテスタント国家であるイギリスから輸入された方法であること、世俗的精神が非常に強いことなどを理由としてカトリックは大反対した。

1816年2月29日の勅令では、ユダヤ人については何も規定されていなかった。このことに対して、長老会は強い不満を抱いた。結局ユダヤ人向けの初等学校は1820年代に長老会の推進する形で設置されるようになり、アルザスの最初のユダヤ初等学校は1820年、ストラスブールに設立された。この学校では、タルムードを中心とするユダヤ人の伝統的な教育内容より、フランス市民への同化を促進させるための教育内容が盛り込まれており、例えば教育言語はフランス語であり、言語に関する科目としてもフランス語、ドイツ語、ヘブライ語がおかれた。そして、アルザス・イディッシュ語の使用は厳禁された。また、相互教授法が導入された。これを嚆矢として、アルザス各地にユダヤ初等学校が設立されるようになるのであるが、その一方で「近代的な」教育内容に反発するユダヤ人も少なくなかった。さらに、ユダヤ初等学校の教員も非ユダヤ人と同様教員免状が必要であったが、特にフランス語の言語能力の点で教員不足が深刻な問題となり、「もぐり」と呼ばれるような学校が農村部を中心に存在していた。このような学校では、免状を持たない教員が教え、アルザス・イディッシュ語も使用されていた。また、教育内容はほぼ宗教教育に限られていた。

ギゾー法の制定はユダヤ人側にも歓迎された。先述したとおりギゾー法は公立の初等学校設置の義務化を定めたものであるが、宗教別の公立学校を認めていた。公的補助金を受け、充実した施設と教育内容を備えた公立ユダヤ初等学校を設立することで、よりユダヤ人の同化が進展すると考えられたのである。

3. 今後の研究の見通し

今後の課題としていくつか挙げられるが、まず、ギゾー法以後の状況について考察する必要がある。ギゾー法の実効性を確認するために、1840年代の状況について分析すること、そして、1850年に制定されたファルー法の性格、ユダヤ人初等教育への影響について分析することが求められよう。ファルー法は、一般的にはギゾー法に比べ、カトリックの教育への介入が強まったものと理解されている。したがってこのファルー法の制定がユダヤ人の初等教育にどのような影響を与えたのかについても分析することは重要であると考ええる。

次に、アルザスの状況について、他地方と比較することでより明らかにすることが求められる。やはり19世紀に入るとパリのユダヤ人社会が中心になっていくので、パリの状況と比較し、改めてアルザスユダヤ人の特質を考察していきたい。

この研究テーマは初等教育を中心に取り上げてユダヤ人の同化について考察するものであるが、もう少し視野を広げれば、同化を促進するための手段として職業教育の必要性も主張されていた。解放により職業選択の自由がユダヤ人に認められたので、それまでの主要な職業であった金貸しや行商に代わり、農業や手工業に従事させることでフランス市民としてふさわしいユダヤ人を育成すべきだと考えられたからである。そして、実際にユダヤ職業学校がアルザスも含めて各地に設立されるのであるが、これは通常初等学校を卒業した生徒が入学するものである。したがって、この職業教育がどのように初等教育と関連していたのかについても考察していきたい。広い意味での同化と教育の問題について探っていきたい。

先回りしていえば、「同化ユダヤ人」という名称があるにもかかわらず彼らが実際にフランス社会に同化できていたのか、という点を明らかにするのは不可能である。また、彼らが実際にどのようなアイデンティティを持っていたのか、という点についても一概にまとめることはできない。しかしながら、少なくとも国民統合が進む19世紀ヨーロッパ、とりわけその中心的な存在におけるフランスにおいて、ユダヤ人の同化を実現させることは喫緊の課題であると当時意識されていたことは確かである。特にこの意識は長老会をはじめとするユダヤ

人エリート層の中において共有されていたと考えられる。もともとは教育に熱心であったユダヤ人が、同化を促進するための手段の一つとして初等教育を重要視していたことには疑いがないであろう。